

本来 特支学級や通級教室は教室に入れない生徒のために開設しているのではありません。しかし事実として通級教室のかなりの割合の生徒が教室に入れる生徒ではありませんでした。形も様々で、欠席数から状況が理解できません。課題を一般化しようとチェックシートなどで実態把握してみました。

結論から言うと 各個人 状況がばらついて、不登校傾向の生徒の課題をまとめて一般化はできませんでした。そして初期の段階から回復できた生徒は数名いましたが、教室に入れない傾向が長引いた生徒で教室に完全な形で戻れた生徒はいませんでした。

ですが、分かったことがありました。

兆候が出てからの初期と1か月後のチェックシートを見ると課題が変化していることがわかりました。生徒は初期理由がだんだん変わっていき、より深刻な入室拒否の理由に進んでいくようでした。

兆候が出て時期が過ぎると 入りたくない理由が、教室に入らない劣等感や罪悪感に変化して現れます。教室に入ることにより劣等感や罪悪感、違和感が生じてからは入室が難しくなってくるようです。

複合して複雑になった嫌悪感を解消するのは、環境のリセットが必要かもしれません。

一定期間 状態が続いたときは もう卒業や進路に至るまで解決が困難でした。

来週まで様子を見ましょう、と言ってる間に対処時期を過ぎるかもしれません。

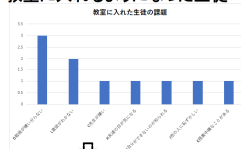
卒業や進路で、今までの劣等感や罪悪感がリセットされると普通に登校できる生徒が出てきます。

不適応傾向の生徒

特支教育・通級教室でも

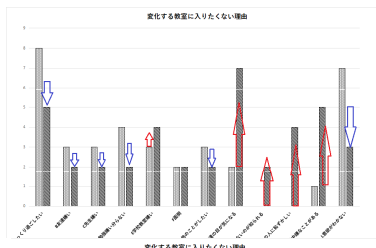
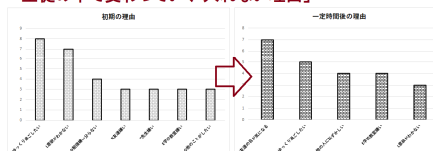
課題を把握し対応したい・・・

教室に入れるようになった生徒



- ・提出物を免除する
- ・ペア学習などを配慮する
- ・無理な活動参加をさせない

生徒の中で変わっていく「入れない理由」



- ★友達の目が気になる
- ★自分ができないのが知られる
- ★他に人に恥ずかしい
- ★嫌なことがある



劣等感・嫌悪感・罪悪感
の発生、増加
入室が困難

しかし高校の先生方と情報交換すると定時制高校では「2年目の壁」と言っていて、入学して2年目になるとまたこの不登校傾向が出てくるのだそうです。初期の段階で教室に戻れた生徒が三人いました。

保護者の協力などで対処の動き出しが早かったことが幸いしました。

提出物でほかの人の目が気になったり、みんなと活動する中で劣等感を感じたりしていましたが、提出物を免除する。ペア学習の時友達に理解してもらう。等の対処ができました。対応できた例は 初期であった。対処法が明確だった。そして情緒の支援が必要ありませんでした。いきなり学習ができて楽しくなるのは難しいですが、劣等感を取り除くことは対処として有効でした。

別項目で述べますが、情緒に支援が必要な生徒は、一度持った嫌悪感を解消する事に時間がかかる場合があります。ずいぶん聞き取りや相談をしましたが、残念ながら事実として教室に入れない課題は、数週間の初期を過ぎると有効な手立てが講じれなかった。というのが本当のところでは。起きてからの対処が難しく、予防や初期対応が有効だと感じています。

総括が十分できませんでしたが、情緒的な支援が必要な生徒への予防策は根本的な学校環境の課題もあると思います。別項目で述べたいと思います。

END

教室に入れるようになった生徒

- ・ごく初期の対応
- ・対処法(提出物・ペア配慮)が明確
- ・情緒に支援が必要な生徒ではない



罪悪感や劣等感 対応は困難

予防策または初期対応

情緒に支援が必要な生徒の予防は・・・

環境変化(進路・卒業)で好転

教室に戻れた生徒

- ・ 初期の対応
- ・ 明確な対処
- ・ 情緒的支援ではない

初期対応と予防策が有効